Tsukuba Psychological Research
1993, **15**, 133-146

新しい視点からの親子関係尺度の作成と検討

筑波大学心理学系　新井邦二郎　高野　清純　庄司　一子
丹羽　洋子　藤生　英行
筑波大学学校教育部　浜口　佳和
筑波大学大学院(博)心理学研究科　尹　熙奉　小林　真
広田　信一　谷島　弘仁

Construction of the parent-child relationships scale from the new point of view

Kunijiro Arai, Seijun Takano, Kazuko Shoji, Yoko Niwa, Hideyuki Fujiu, Heebong Yoon, Makoto Kobayasi, Sinichi Hirota, Hirohito Yajima (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*) and Yosikazu Hamaguchi (School Education Center, University of Tsukuba, Tokyo 112, Japan)

The purpose of this study was to construct a new parent-child relationships scale and clarify the relation between children's cognitions for their parent behavior and the father and mother's rating of their own behavior in eight different areas. The parent-child relationships scale is a multidimentional instrument designed to measure three facets (i.e., cognition, control and affection) of child-rearing behavior derived from the findings of the previous studies. Subjects were 407 third through sixth-grade students and their parents. The results from the two diverse samples (i.e., Japanese and Korean) are considered.The correlations among the different three dimentions were similar for the two groups (i.e. ,father and mother). Children's rating score for thier parental behavior were weakly correlated with parents' ratings of their own behavior. These findings have important implications for study of children's social behavior and also support the construct validity of interpretations based on the new parent-child ralationships scale.
Key word: Parent-child relationships, cognition, control, affection, school age children, father, mother, Japanese, Korean.

I　はじめに

1　親子関係の類型化の試み

本研究は，親子関係の類型化を直接にめざすものではないが，類型化する際の親の養育態度や行動の次元が，新しい親子関係尺度を作成する際にも参考となるので，とりあげてみる．

Symonds, P.M.(1939)が，「支配―服従」と「拒否―受容」の２次元の組み合わせから，甘やかし，干渉しすぎ，残酷，無視のいずれも臨床的に問題となる４つの親の養育態度を記述して以来，親子関係を類型化する試みは数多くなされている．それらのうち，主なものをひろいあげてみよう．

Baldwin, A.L.(1945)は，「受容」，「甘やかし」，「民主的」を用いて，また Ausubel, D.P. et al(1954)は，「受容―拒否」，「内よりの評価―外よりの評価」

の次元を使用し，さらにLasko, J.K.(1954)は，「暖かさ」，「民主的」，「甘やかし」を用いている．同様に，Shaeffer, E.S. & Bell, R.Q.(1957)は，「愛情―敵意」と「自立―統制」の2次元の組み合わせを考え，カナー，L.(1964)は，「寛容と愛情」，「明白な拒絶」，「完全主義」，「過保護」を挙げている．

こうして取り上げられた親子関係の次元や親の養育態度の多くは，児童臨床の現場から考え出されたもので，子どもたちのさまざまな人格・行動上の諸問題の背景に存在すると仮説されるものをカテゴライズしたものである．その後，質問紙法を用い，その結果を因子分析やクラスター分析などにかけることにより，帰納的に親子関係の次元や親の養育態度を類型化していくことも盛んに行われるようになった．Champney, H.(1941)が創始したFPBS(Fels Parents Behavior Scales)「自由―専制」，「刺激―無視」，「赤ちゃん扱い―大人扱い」，「悪適応―良適応」，「是認―非認」，「合理的―非合理的」，「訓練―自由成長」，「社会的―個人的」の8カテゴリーを因子分析したRoff, M.(1949)は，「子どもへの関心」，「民主的指導」，「許容性」，「親子間の調和」，「親の社会適応性」，「家庭の活動性」，「家庭のレディネスの欠如」の7因子になることを見い出している．また，Radke, M.J.(1946)の「民主的―専制的」，「拘束の厳しさ―寛容さ」，「親子間の信頼関係良好―不良」，「子どものしつけにおける父母の責任の平等―不平等」，「同胞間の調和―不調和」の6カテゴリーからなる質問紙の結果を因子分析した中西(1959)は，「権威的―民主的」，「同胞間不調和―調和」，「許容的―非許容的」，「子どもらしさ―大人らしさの奨励」の4因子にまとまることを見い出している．

2　親子関係と子どもの発達との関係

最近では，質問紙法，面接法，行動観察法などによって得られた親の養育態度や行動と子どもの発達との関係を実証的に扱う研究が盛んに行われるようになってきた．それらの主なものを取り上げてみる．

Baumrind, D.(1967)の研究手続きは少し変わっており，子どもの方から親をみようとした．すなわち，ナーサリースクールの子どもの行動を観察する一方，家庭訪問と質問紙により親の態度や行動を測定した．その結果，自己統制があり，探求心も旺盛で，充足感もある子どもの親は，統制や成長への要求が高いと同時に，暖かく，客観的で，子どものコミュニケーションに対し受容的であった．このような高い統制と同時に子どもの自主性や成長に積極的な励ましを行うことを，権威ある(authoritative)親の行動と，Baumrind, D.は呼んでいる．また，不平・不満が多く，引っ込み思案で，他者への依存や不信が強い子どもの親は，孤立していて統制が強く，暖かさに欠けることを見い出した．このような親を独裁的(authoritarian)親と呼んでいる．さらに，自己信頼感が最も低く，自己統制や探求心の少ない子どもの親は，統制に欠け，成長への要求も低く，やや暖かい．このような親を，甘やかし(permissive)の親と呼んでいる．Baumrind, D.では，子どもを男女別にデータを処理し，権威ある親の行動の場合，女児で上述したような結果を確認しているが，男児では親が同調的でないときにのみ確認されるなど，男女で結果がやや異なることを報告している．

MacDonald, K. & Parke, R.D(1984)は，3・4歳児の仲間とのコンピテンスを観察し，それと父子，母子の遊びの仕方との関連を調べている．そこで，父親との身体的遊びと母親の言語的行動が，子どもの仲間関係にプラスの関係をもっており，特に男児において明確に示されること，さらに父親の指示的行動は男女児問わず，子どもの人気と負の関連を示すが，他方，母親の指示的行動は女児にのみ人気と正の関連を示すことなどを見い出している．またMacDonald, K.(1987)は，3～5歳の男児の家での親子間の行動観察の結果から，友だちから無視される男児の親は身体的遊びの少ないこと，友だちから拒否される男児の親は，人気のある子どもとくらべて，刺激の与えすぎや刺激のなさが顕著なことを報告している．

Lerner, J.V. & Galambos, N.L.(1985)は，ニューヨーク気質縦断研究データに基づき，母親役割の満足感と子どもの適応とが母子関係の質により媒介されることを解明しようとした．パス解析の結果，母親の役割に満足のできない母親は，子どもに対してより多くの拒否を見せ，これが難しい子ども(difficult child)をより多く生み出すことを示した．

またLadd, G.W. & Price, J.M.(1986)は，8～11歳の子どもとその親を調査し，実際及び知覚された認知的・社会的コンピテンスの双方と，そうしたコンピテンスを育てることを親が困難視することとの間に高い相関のあることを示した．さらにLadd, G.W. & Golter, B.S.(1988)は，就学前の幼児の仲間とのやりとり，友だちの数，一貫した友だちなどの社会的コンピテンスと，そうした仲間関係を開始させる母親の行動とに関連がみられ，他方，仲間とのやりとりをモニターする母親行動とは無関係であることを確認している．Putallaz, M.(1987)も，小学生のソシオメトリック地位や社会的知識・行動が母親の社会的知識や母子間の遊び，母親同士のやりと

りなどと有意な相関をもっていることを示している．

最後に，Cohn, D.A.(1990)は，6歳児の夏の時点のアタッチメントの質と，秋の入学後の社会的行動との関連を調べ，男児では不安定なアタッチメントが仲間や教師から好かれることが少なく，仲間から攻撃的と知覚され，行動問題を多くもつこととつながりをもつことがみられたが，女児ではそのような関連性はみられないとしている．

以上，親子関係と子どもの，特に社会的な発達との関連に関する研究をみたが，こうした研究を実りあるものにするためにも，内容のある親子関係の測定尺度を作成する必要がある．

3　我が国における親子関係診断検査

標準化され，市販されているもののうちから主なものを取り上げ，検討していこう．

長い間，我が国で最もよく使用されているのは，田研式親子関係診断テスト(品川不二郎・品川孝子共著，日本文化科学社発行，小学校4年以上適用)である．このテストの特色の第1は，「子ども回答用」と「親回答用」の2種類から構成されていること，さらに「親回答用」検査は父親，母親が別々に回答するようになっていることである．これによって，親の養育態度や行動をめぐっての親子間のずれや，父母間のずれをみることができる．第2の特色は，親の養育態度を10の次元(タイプ)にしたがって診断できることである．すなわち，拒否の中に「消極的拒否型」と「積極的拒否型」，支配の中に「厳格型」と「期待型」，保護の中に「干渉型」と「不安型」，服従の中に「溺愛型」と「盲従型」，そしてさらに「矛盾型」と「不一致型」がある．これによって，両親の養育態度が総合的に診断できるようになっている．

次に，教研式親子関係診断検査(原野広太郎・応用教育研究所共著，日本図書文化協会発行，小学3年生以上適用)は，子どものみに回答を求めるテストである．子どもの回答から，①親の子どもに対する態度と②子どもの親に対する態度の2つの側面が測定できるようになっている．これが第1の特色だとすると，第2の特色は，診断しようとする親子関係の次元を精選していることである．すなわち，①の子どもに対する親の態度では，「受容性(受容―拒否)」と「理解性(理解―支配)」の2次元であり，②の親に対する子どもの態度では，「独立性(独立―依存)」と「信頼性(信頼―反抗)」の2次元である．第3の特色は，親を父親，母親に分けないで，父母を統合して親というイメージにし，その親の態度について子どもに回答させるようにしていることである．その主な理由として，片親しかいない子どもがいること，同じ質問を父親，母親と2度回答させることによる系列効果を避けることがあげられている．

最近，作成された発達研式親子関係診断検査(詫摩武俊監修，発達科学研究教育センター発行，小学5，6年生適用)の特色の第1は，診断しようとする次元の数を絞っており，親の養育態度については，「受容性」と「尊重性」の2次元を，親に対する子どもの態度については「愛着性」の1次元のみを診断しようとする．第2の特色は，親については父親，母親から別々に回答を求めるとともに，子どもについても男女で別々に診断するようになっていることである．特色の第3として，親子の双方に同一の質問項目を設定してあり，双方のとらえ方の差異・ずれも評価できる点をあげることができよう．

以上のような代表的な検査を含めて，一般に親子関係診断検査には，次のようなヴァリエーションがみられる．

①測定・診断しようとする親子関係の次元の数

田研式検査のように網羅的に診断する検査もあれば，教研式や発達研式検査のように少数の次元に限定して親子関係を診断するものもある．

②親と子どもの双方から回答を得るのか，それとも子供のみから回答を得るのか

田研式や発達研式検査の場合は前者のケースに該当し，教研式検査の場合は後者のケースに該当する．

③父親，母親に対して回答を別々に求めるのか，それとも親として1つの回答を求めるのか

田研式および発達研式検査は，前者のケースに該当し，教研式検査は後者のケースに該当する．

④子ども側の回答を男女別々にして診断するのか，それとも男女を一緒にして診断するのか

発達研式検査は前者にあてはまり，田研式と教研式は後者に該当する．その検査が父親と母親から別々に回答を求め，子どもの回答も男女別々に処理するとならば，父親―男児，父親―女児，母親―男児，母親―女児の4通りの親子関係を診断することになり，また親が父親，母親に分かれて，子どもが男女に分かれない場合及び親が父親，母親に分かれずに子どもが男女に分かれる場合は，2通りの親子関係を診断することになり，親も子どもも分かれずに1つの場合は，1通りの親子関係を診断することになる．

4　新しい親子関係尺度の特色

これまでの研究は，親の養育態度や行動が，子ど

ものパーソナリティや社会的行動の発達に影響を与えていくことが明らかにしているが，こうした研究をさらに発展させる視点から，新しい親子関係の測定にどのようなものが必要かを考えてみよう．

①親子関係の次元に認知(知識)を追加する必要性がある

これまでの親子関係に関する研究ではほぼ一定して，子どもの発達に好影響をもたらすのは，「暖かく，民主的で，適度に自立を奨励する養育態度」(大村，1981)であることが認められているが，これらの親子関係の次元は当然含めなければならないにしても，親がどれほど意識して，そうした養育態度や行動を行っているかを取り上げる必要がある．これまでのところ，親がどれほど養育態度や行動を認知し，それについての知識をもっているかという次元は，考慮されることはなかった．親子関係には，親が子どもに影響を及ぼす側面と子どもが親に影響を及ぼす側面の2つが存在することは言うまでもない．親は，子どもの実際の様子を把握しながら，ある種の養育行動を強めたり弱めたりする．子どもの行動や親自身の行動のこうした認知は，適切な親子関係においては不可欠なものと考えられる．それゆえ，新しい次元として「認知(意識)」を含めていくことが必要と考える．

②親の「愛情」を高低のように量的だけでなく，「子ども中心の愛情」，「親中心の愛情」，「愛情なし」というように質的にとらえていく必要がある

これまでの親子関係に関する研究からは，「暖かさ」，「受容性」，「子どもへの関心」などの次元名で，この「愛情」が扱われることが多いが，親が子どもにかける愛情は，親自身のための場合と，あくまで子どもの発達を願っての愛情の場合の区別をしなければいけないし，また区別できると考えられる．

③父親，母親とで別々に質問紙を用意する

父親不在による問題点が指摘されている(リン，D.B., 1981)．父親，母親とは輻輳的に子どもの発達に影響することのほかに，それぞれ独自な形でも影響を与えていく．こうした独自の影響の仕方をとらえていくためには，父親，母親とで別々の回答を得ることが必要となろう．また，前述したBaumrind, D.(1971)の研究結果が示すように，父親と母親，男子と女子というような間の組み合わせのもとで，親子関係の流れをつかむことが求められるといえよう．

これまでの親子関係診断検査では，例えば田研式のように「お父さんは黒鉛筆で，お母さんは赤鉛筆で○印をつけて下さい」という指示のもと，1つの回答用紙を共通に利用していることが多いが，このような実施の仕方では正確な記入は期待しにくい．それゆえ，発達研式検査のように，父親用，母親用と，別々の質問紙を用意し，「互いに相談することはしないで記入して下さい」という実施の注意も与えていく必要がある．

④親の回答と同時に，子どもの回答も得る

親の養育態度や行動は，子どもの認知や意識とは独立して，本来は客観的に存在しているはずのものであろう．しかし，子どもの発達や行動に具体的な影響を与えるのは，むしろそうした親の養育態度や行動を子どもがどのように理解しているかという主観的な世界の方ではないだろうか．もちろん，親自身が回答した内容も，必ずしも客観的なものとはいえず，それはあくまで親の主観的なものにすぎないともいえるが，そうだとすれば，なおのこと子どもが親の養育態度や行動をどう見ているのかが重要になってくるであろう．

5　本研究の目的

前述したような特色をもつ新しい親子関係尺度を作成し，小学校3～6年までの日本及び韓国の児童とその両親を対象に実施し，その質問紙に関する基本的統計量を得ることを，本研究の目的とする．なお，本研究を，親子関係と子どもの社会的行動の発達との関係についての研究の前段階のものとして位置づけている．

Ⅱ　方　法

1　尺度の構造

本研究で作成する尺度の枠組みとしては，①「認知(意識)」，②「支配」，③「愛情」の3つの次元を設定している．最初の「認知(意識)」の次元の中には，「親の行動に対する知識」と「子の行動に対する知識」の2つが含まれている．これらの認知(意識)の程度が高いか，低いかによって，親自身の子どもに接するときの態度として，あるいは子どもへの態度として，意図的に関わっているか，計画的に対応しているか，意識してしつけているか，といった観点が明らかにされる．

次に「支配」の次元は，支配の高低によって，親が子どもにそのように行動させようとしているか，親がどの程度かかわっているか，親が子どもに自分の思い通りに行動させようとしているかといった観点が測定される．

最後に「愛情」の次元は，親が子どもに対してどのような愛情のかけかたをしているかといった観点から，「子ども中心の愛情」「自己(親)中心の愛情」

「子どもへの愛情なし」に分類される．

また，項目作成の時の領域としては，社会的ルール/礼儀作法，安全，けいこごと/教育，テレビ/いたずら，健康，けんか，遊び・友達関係，お金・おもちゃ，の８領域について，それぞれ２項目ずつ，合計16項目の行動が取り上げられた．

2　尺度の内容

①父親版尺度・母親版尺度

親用尺度は，「父親版」と「母親版」の２種類が作成された．まず，「父親版」については，認知(意識)」の次元からの，「子どもの行動についての父親の知識(以下Ｆ１尺度と略す)」と「自分の行動についての父親の認知(以下Ｆ２尺度と略す)」の２つの観点に，「支配」の次元からの「父親の支配(以下Ｆ３尺度と略す)」の観点を加えて，合計３つの下位尺度が作成された．したがって，３つの下位尺度それぞれについて，各８領域からとりあげた項目16項目によって質問項目を作成したため，最終的には48項目の質問から成り立っている．回答の形式は，「よくあてはまる」～「まったくあてはまらない」までの４件法でなされ，各，４～１点に得点化された．

また，「愛情」の次元については，上に示した８つの領域における子どもの行動を取り上げて，それに対して親はどのように対応するかについて，「子ども中心的愛情」，「自己(親)中心的愛情」，「愛情無し」の３カテゴリーからそれぞれ１項目づつ選択肢が設定された．したがって，質問項目は８問で，選択肢は合計24項目作成された．

「母親版」については，「子どもの行動についての母親の知識(以下Ｍ１尺度と略す)」と「自分の行動についての母親の認知(以下Ｍ２尺度と略す)」，さらに「母親の支配(以下Ｍ３尺度と略す)」の３つの観点から，父親用と同様の，下位尺度が作成された．「愛情」の型の測定についても同様の質問紙が用いられた．

②子ども版尺度

子ども版尺度は，「父子関係」を見るものと「母子関係」を見るものの，２つから成り立っている．まず，「父子関係」測定の質問紙に関しては，「認知」の次元に関しては，「子どもの行動についての父親の知識に対する子どもの認知(以下CF１尺度と略す)」が，「支配」の次元については，「父親の支配に対する子どもの認知(以下CF２尺度と略す)」が取り上げられ，これら２つの観点から，下位尺度が作成された．したがって，２つの観点について８領域から１項目づつ質問項目が作成されたため，合計16項目から成り立っている．

同様にして，「母子関係」を見るものは，「子どもの行動についての母親の知識に対する子どもの認知(以下CM１尺度と略す)」と「母親の支配に対する子どもの認知(CM２尺度と略す)」の観点から，合計16項目から成り立っている．

回答の形式は，「そう思う」と「そう思わない」の２件法でなされ，各，１と０とに得点化された．

3　被験者

①日本サンプル

富山県内の公立小学校　３年生30名，４年生38名，５年生28名，６年生30名　合計126名の児童とその両親

埼玉県内の公立小学校　３年生37名，４年生31名，５年生40名，６年生27名　合計135名の児童とその両親

②韓国サンプル

ソウル市内公立小学校３年生37名，４年生42名，５年生34名，６年生43名　合計156名の児童とその両親

4　手続き

①調査期間

日本サンプル　1992年　６月下旬～７月上旬

韓国サンプル　1992年　８月上旬～下旬

②実施方法

子どもの被験者に対しては，クラスごとの集団形式で，「子ども版尺度」が実施された．実施者は学級担任教師で，事前に実施上の注意事項が詳細に説明されていた．実施に際しては，教師が回答の仕方を説明した後，一斉に回答を記入する方式がとられた．

その親(父親と母親)の被験者に対しては，それぞれの子どもが各家庭に持ち帰る形で，回答がなされた．回答の際には，「２人で相談する事のないように」，「１週間の期限で提出するように」との注意がなされた．

子ども版・父親版・母親版いずれも無記名で実施され，各用紙に親子で同一のナンバーをふることによって，後の分析でマッチングが可能となるように配慮された．

Ⅲ　結果と考察

1　各尺度の信頼性の検討

各尺度についての統計的数値は，Table １に掲載する．まず，日本サンプルを中心に考察する．

①父親版尺度

F1尺度(子どもの行動についての父親の知識)この下位尺度に含まれる各項目の平均値は，2.29から3.25の間にあり，標準偏差は.81から.97の間にあった．I－T相関値は，.22から.61までの間にあった．内的整合性をみるため，α係数を算出したところ，.821となった．

F2尺度(自分の行動についての父親の認知)　この下位尺度の各項目の平均値は，2.42から3.25の間にあり，標準偏差は.72から.93の間にあった．I－T相関値は，.36から.58までの間にあった．内的整合性をみるため，α係数を算出したところ，.861となった．

F3尺度(父親の支配)　各項目の平均値は，1.90から3.62の間にあり，標準偏差は.59から.95の間にあった．I－T相関値は，－.03から.42までの間にあった．内的整合性をみるため，α係数を算出したところ，.554となった．

②母親版尺度

M1尺度(子どもの行動についての母親の知識)この下位尺度に含まれる各項目の平均値は，2.58から3.78の間にあり，標準偏差は.45から.86の間にあった．I－T相関値は，.25から.51までの間にあった．内的整合性をみるため，α係数を算出したところ，.797となった．

M2尺度(自分の行動についての母親の認知)　この下位尺度の各項目の平均値は，2.72から3.54の間にあり，標準偏差は.66から.87の間にあった．I－T相関値は，.24から.50までの間にあった．内的整合性をみるため，α係数を算出したところ，.790となった．

M3尺度(母親の支配)　この下位尺度の各項目の平均値は，2.08から3.68の間にあり，標準偏差は.54から.98の間にあった．I－T相関値は，－.02から.33までの間にあった．内的整合性をみるため，α係数を算出したところ，.540となった．

③子ども版尺度

CF1尺度(子どもの行動についての父親の知識に対する子どもの認知)　この下位尺度に含まれる各項目の平均値は，.46から.79の間にあり，標準偏差は.41から.50の間にあった．I－T相関値は，.16から.39までの間にあった．内的整合性をみるため，α係数を算出したところ，.595となった．

CM1尺度(子どもの行動についての母親の知識に対する子どもの認知)　この下位尺度の各項目の平均値は，.66から.96の間にあり，標準偏差は.21か

Table 1　各尺度の統計数値

		日本サンプル				韓国サンプル				
		平均[1]	標準得偏差	I-T相関	α係数	平均	標準偏差	I-T相関	α係数	t 値[2]
父親版	F1	45.00	7.40	0.22～0.61	.82	45.78	5.90	-0.39～0.45	.66	-1.56
	F2	44.79	7.64	0.36～0.58	.86	45.59	5.99	0.14～0.42	.69	-1.66+
	F3	39.03	5.01	-0.03～0.42	.54	43.33	5.09	-0.00～0.37	.50	-8.09**
母親版	M1	52.33	5.74	0.25～0.51	.80	49.17	5.71	-0.29～0.51	.70	4.72**
	M2	49.70	5.94	0.24～0.50	.79	48.33	6.51	-0.01～0.59	.76	1.76+
	M3	40.89	4.77	-0.02～0.33	.54	45.08	5.32	0.10～0.46	.58	-8.01**
子ども版	CF1	4.59	1.93	0.16～0.39	.60	4.28	1.88	-0.13～0.39	.56	1.29
	CM1	6.33	1.57	0.09～0.39	.56	5.71	1.47	-0.14～0.43	.45	3.63**
	CF2	3.58	2.00	0.09～0.43	.63	5.01	1.69	0.06～0.36	.47	-8.03**
	CM2	5.28	1.57	0.13～0.27	.48	6.25	1.38	0.05～0.30	.39	-6.78**

+ $p<.10$　* $p<.05$　** $p<.01$

1)各尺度得点の平均値を示す．2)t値は，日韓間の平均値の差について算出したものである．

なお，各下位尺度の名称は以下の通りである．

F1…子どもの行動についての父親の知識
F2…自分の行動についての父親の認知
F3…父親の支配
M1…子どもの行動についての母親の知識
M2…自分の行動についての母親の認知
M3…母親の支配
CF1…子どもの行動についての父親の知識に対する子どもの認知
CM1…子どもの行動についての母親の知識に対する子どもの認知
CF2…父親の支配に対する子どもの認知
CM2…母親の支配に対する子どもの認知

ら.48の間にあった．I－T相関値は，.09から.39までの間にあった．内的整合性をみるため，α係数を算出したところ，.564となった．

CF 2 尺度(父親の支配に対する子どもの認知)この下位尺度の各項目の平均値は，.17から.60の間にあり，標準偏差は.37から.50の間にあった．I－T相関値は，.09から.43までの間にあった．内的整合性をみるため，α係数を算出したところ，.626となった．

CM 2 尺度(母親の支配に対する子どもの認知)この下位尺度の各項目の平均値は，.23から.91の間にあり，標準偏差は.29から.50の間にあった．I－T相関値は，.13から.27までの間にあった．内的整合性をみるため，α係数を算出したところ，.479となった．

以上の結果から，F 1 尺度，F 2 尺度，M 1 尺度，M 2 尺度については，I－T相関，α係数などの観点から信頼性が保証されていると考えられよう．その他の尺度については，信頼性が高いとは言えない結果が得られた．その理由として，F 3 尺度，M 3 尺度などの支配尺度については，項目の中に含まれる領域によって親の対応の仕方が異なることを反映しているのではないかと考えられよう．すなわち，ある領域では親は支配的に振る舞うのに対して，他の領域では支配的ではないというように，領域によって対応の仕方が異なることを示唆していると考えられる．

また，CF 1 尺度，CM 1 尺度，CF 2 尺度，CM 2 尺度においては，小学校 3 年生から 6 年生までを調査対象としたが，小学校中学年(3，4年生)について回答が困難であったことが一因ではないかと考えられる．

韓国サンプルについては，Table 1のとおりであるが，日本サンプルよりも，信頼性が低い傾向がみられた．これは，尺度の項目内容の文化的文脈の違いの問題も要因として考えられよう．

2　愛情尺度の検討

愛情尺度は，8つの場面において子ども中心の愛情，自分(親)中心の愛情，愛情なしのいずれの考え方を選ぶかを選択させるものであった．8つの場面のうち，5つ以上の場面で同一の趣旨の選択肢を選んだ場合，子ども中心の愛情，自分(親)中心の愛情，愛情なしとカテゴライズされた．

その基準結果，いずれのカテゴリーにも属さないとされた人数は，日本サンプルでは父親111名(42.5%)，母親106名(40.6%)であった．韓国サンプルでは，父親89名(57.1%)，母親72名(46.2%)であった．これらのいずれにも属さないとされたものを除いて，父親の愛情と母親の愛情のカテゴリーについて作成されたクロス表がTable 2-1とTable 2-2である．

日本サンプルでは，父親および母親のいずれも，愛情なしのカテゴリーに分類されたものが，60%以上みられた．それに対して，韓国サンプルでは，子ども中心の愛情カテゴリーに分類されたものが，50%以上みられ，日本サンプルとは対照的であった．

3　各尺度得点の学年差・性差

各尺度ごとの学年性別の平均値，標準偏差はTable 3-1からTable 3-10までに掲載する．各尺度得点の学年差・性差を検討するため，各尺度得点に対して，学年・性を各要因とした2要因分散分析が行われた(Table 3-1からTable 3-10までを参照のこと)．

その結果，日本サンプルにおいて，F 3 尺度，CF 1 尺度，CM 1 尺度で学年の主効果が，またCM 1 尺度で性の主効果が有意であった．また，M 2 尺度において性の主効果の有意傾向がみられた．さらに，F 3 尺度の交互作用が有意であった．

F 3 尺度の交互作用は，4年の男子の得点が他に比べて顕著に高いことによると考えられる．F 3 尺度の学年の主効果についても4年生男子の得点が，4年生全体の得点を引き上げていることによると考えられる．なぜ4年生の男子だけの得点が高かったのかについては，今後の検討の余地が残されている．また，CF 1 尺度の学年の主効果についても，4年の得点がほかに比べて顕著に高いことによるものと考えられる．

CM 1 尺度の学年の主効果は，学年が上がるに従って得点が下がる傾向による．これは学年が上がるに従って，母親の子どもに対する知識・関心が低くなると子どもたちはとらえていることを反映していると考えられよう．CM 1 尺度の性の主効果は，男子より女子の得点が低い傾向による．女子の方が男子よりも母親の子どもに対する知識・関心も少ないと感じていることを示唆している．M 2 尺度の性の主効果の有意傾向は，女子より男子の得点が低い傾向による．これは男子に対して女子よりも，母親が意識的でない対応をしている傾向を示唆しいる．

韓国サンプルにおいては，M 3 尺度で学年の主効果，CF 2 尺度で性の主効果が有意であった．またM 2 尺度で性の主効果の有意傾向，およびCM 2 尺度で学年の主効果の有意傾向がみられた．

M 3 尺度の学年の主効果は，学年が上がるとともに得点が低くなることによる．これは学年が上がる

Table 2-1 父母の各愛情カテゴリーの人数(日本サンプル)

		母親 親中心の愛情	子ども中心の愛情	愛情なし	計
父親	親中心の愛情	5	0	23	28(30.4%)
	子ども中心の愛情	0	0	4	4 (4.3%)
	愛情なし	3	4	53	60(65.2%)
	計	8(8.7%)	4(4.3%)	80(87.0%)	92(100%)

Table 2-2 父母の各愛情カテゴリーの人数(韓国サンプル)

		母親 親中心の愛情	子ども中心の愛情	愛情なし	計
父親	親中心の愛情	4	0	0	4 (8.3%)
	子ども中心の愛情	0	24	2	26(54.2%)
	愛情なし	0	12	6	18(37.5%)
	計	4(8.3%)	36(75%)	8(16.7%)	48(100%)

Table 3-1 F1尺度の学年差・性差

	日本	韓国	t
3年男子	44.24(6.43)	44.91(5.80)	-0.38
女子	43.41(7.51)	46.93(4.21)	-2.05*
4年男子	47.15(5.39)	44.80(4.40)	1.59
女子	43.92(8.45)	45.05(5.90)	-0.55
5年男子	43.32(7.95)	47.60(6.29)	-2.13*
女子	46.61(8.08)	45.92(7.23)	0.26
6年男子	45.21(4.90)	46.39(7.56)	-0.64
女子	44.24(7.35)	45.00(5.18)	-0.38
学年主効果	0.37	0.69	
性主効果	0.25	0.04	
交互作用	0.87	0.73	

*p<.05
注)主効果および交互作用については，F値を記した.

Table 3-2 M1尺度の学年差・性差

	日本	韓国	t
3年男子	51.76(6.19)	50.14(6.07)	0.94
女子	52.09(5.74)	49.93(4.71)	1.27
4年男子	51.62(5.59)	48.10(6.01)	2.10*
女子	52.51(5.29)	48.71(6.01)	2.47*
5年男子	50.17(7.57)	49.90(5.33)	0.14
女子	53.10(5.23)	49.54(7.09)	1.85+
6年男子	52.37(6.23)	49.13(6.70)	1.81+
女子	51.54(6.23)	47.20(4.23)	2.65*
学年主効	0.38	1.32	
性主効果	0.01	0.23	
交互作用	0.58	0.37	

+ p<.10 * p<.05
注)主効果および交互作用については，F値を記した.

Table 3-3 F2尺度の学年差・性差

	日本	韓国	t
3年男子	44.00(6.15)	45.82(6.67)	-0.98
女子	43.91(6.22)	45.33(5.69)	-0.75
4年男子	46.92(5.48)	45.15(6.06)	1.12
女子	44.06(8.20)	43.05(5.93)	0.50
5年男子	42.07(7.29)	46.50(5.79)	-2.27*
女子	46.81(8.18)	47.83(6.01)	-0.39
6年男子	44.07(5.72)	47.47(7.56)	-1.83+
女子	42.94(8.08)	43.90(3.81)	-0.46
学年主効果	0.25	1.14	
性主効果	0.09	1.94	
交互作用	1.59	1.09	

+ p<.10 * p<.05
注)主効果および交互作用については，F値を記した.

Table 3-4 M2尺度の学年差・性差

	日本	韓国	t
3年男子	49.37(6.29)	50.05(6.97)	-0.36
女子	50.55(6.36)	48.07(7.13)	1.19
4年男子	48.21(6.16)	47.95(7.30)	1.12
女子	50.44(5.59)	47.19(6.36)	1.99
5年男子	47.52(7.71)	48.67(6.33)	-0.54
女子	50.61(5.80)	47.38(5.81)	1.66
6年男子	48.59(6.42)	49.43(7.26)	-0.45
女子	49.75(7.18)	46.60(4.77)	1.68
学年主効果	0.18	0.35	
性主効果	3.11+	2.88+	
交互作用	0.18	0.18	

+ p<.10
注)主効果および交互作用については，F値を記した.

Table 3-5　F 3 尺度の学年差・性差

	日本	韓国	t
3 年男子	38.38(4.93)	44.05(5.91)	-3.73**
女子	39.28(4.76)	44.33(4.08)	-3.54**
4 年男子	42.38(4.00)	42.95(3.32)	-0.51
女子	39.89(4.41)	42.14(5.40)	-1.73+
5 年男子	37.41(4.39)	42.65(5.53)	-3.79**
女子	39.42(5.73)	44.42(3.66)	-2.80**
6 年男子	38.26(5.13)	44.61(6.60)	-3.82**
女子	37.43(4.50)	41.65(4.30)	-3.07**
学年主効果	4.58**	0.49	
性主効果	0.11	0.44	
交互作用	2.91*	1.39	

+ p<.10 * p<.05 ** p<.01
注)主効果および交互作用については，F 値を記した．

Table 3-6　M 3 尺度の学年差・性差

	日本	韓国	t
3 年男子	41.14(5.00)	47.55(5.76)	-4.24**
女子	41.97(3.80)	46.73(5.12)	-3.55**
4 年男子	40.93(4.86)	44.30(4.80)	-2.40*
女子	41.58(5.19)	44.24(4.37)	-1.94+
5 年男子	39.77(5.68)	44.38(5.24)	-2.95**
女子	40.65(4.36)	44.93(5.50)	-2.75**
6 年男子	39.52(4.61)	45.26(6.53)	-3.79**
女子	41.00(6.49)	43.20(3.52)	-1.43
学年主効果	1.34	2.66*	
性主効果	1.72	0.67	
交互作用	0.37	0.42	

+ p<.10 * p<.05 **p<.01
注)主効果および交互作用については，F 値を記した．

Table 3-7　CF 1 尺度の学年差・性差

	日本	韓国	t
3 年男子	4.96(2.05)	4.00(1.69)	1.75+
女子	4.75(1.78)	4.27(1.28)	0.93
4 年男子	5.61(1.60)	4.50(2.57)	1.71+
女子	4.64(2.09)	3.55(1.87)	2.01*
5 年男子	3.68(1.57)	4.80(1.61)	-2.50*
女子	4.24(1.96)	4.42(1.73)	-0.28
6 年男子	4.68(1.96)	4.26(1.69)	0.82
女子	3.91(2.17)	4.65(2.16)	-1.11
学年主効果	4.27**	0.94	
性主効果	1.62	0.35	
交互作用	1.76	1.21	

+ p<.10 * p<.05 ** p<.01
注)主効果および交互作用については，F 値を記した．

Table 3-8　CM 1 尺度の学年差・性差

	日本	韓国	t
3 年男子	6.65(1.50)	5.86(1.08)	2.06*
女子	6.50(1.40)	5.60(1.12)	2.14*
4 年男子	6.94(1.09)	5.65(1.79)	2.89**
女子	6.16(1.59)	5.24(1.76)	2.05*
5 年男子	6.36(1.11)	5.86(1.39)	1.48
女子	6.12(1.92)	5.77(1.74)	0.57
6 年男子	6.20(1.77)	6.04(1.19)	0.37
女子	5.08(1.94)	5.40(1.79)	-0.57
学年主効果	3.35*	0.68	
性主効果	6.24*	1.82	
交互作用	0.84	0.48	

* p<.05 ** p<.01
注)主効果および交互作用については，F 値を記した．

Table 3-9　CF 2 尺度の学年差・性差

	日本	韓国	t
3 年男子	3.59(2.26)	5.86(1.08)	-2.95**
女子	3.89(2.01)	5.11(0.99)	-2.71**
4 年男子	4.04(1.80)	5.15(1.90)	-2.07*
女子	3.60(1.93)	4.41(2.02)	-1.52
5 年男子	2.68(1.68)	5.35(1.04)	-7.21**
女子	3.68(2.17)	4.33(1.97)	-0.92
6 年男子	3.28(2.02)	5.26(1.74)	-3.74**
女子	3.33(2.13)	4.90(1.62)	-2.64*
学年主効果	1.88	0.49	
性主効果	0.46	4.17*	
交互作用	1.55	0.43	

* p<.05 ** p<.01
注)主効果および交互作用については，F 値を記した．

Table 3-10 CM 2 尺度の学年差・性差

	日本	韓国	t
3 年男子	5.59(1.62)	6.64(0.95)	-2.66*
女子	5.17(1.53)	6.73(1.22)	-3.44**
4 年男子	5.35(1.70)	5.80(1.32)	-0.99
女子	4.89(1.65)	5.90(1.51)	-2.31*
5 年男子	5.18(1.83)	6.33(1.24)	-2.54*
女子	5.36(1.54)	6.15(1.41)	-1.61
6 年男子	5.28(1.53)	6.17(1.64)	-2.03*
女子	4.96(1.40)	6.30(1.56)	-2.98**
学年主効果	0.93	2.37+	
性主効果	0.47	0.03	
交互作用	0.49	0.12	

+ p<.10 * p<.05 ** p<.01
注)主効果および交互作用については，F 値を記した．

に従って，子どもに対する母親の支配が減少することを示唆している．CF 2尺度の性の主効果，およびM 2尺度の性の主効果の有意傾向は，女子の得点が男子よりも低いことによる．男子は，父親からの支配を強く意識し，また母親自身も男子に対して意識して振る舞うことが示唆されよう．CM 2尺度の学年の主効果の有意傾向は，3年生の得点が顕著に高いことによる．母親の支配は3年生において強く意識されていることがうかがえる．

4　対応する親子間の尺度の相関

対応する親子間の尺度の相関に関する数値をTable 4-1，4-2に示す．なお，学年差・性差がみられた尺度も存在したため，以後に示す偏相関値は，学年・性の要因を統制した偏相関値である．

①父子関係

日本サンプルの子どもの行動についての父親の知識に関する尺度F 1と父親の知識に対する子どもの認知に関する尺度CF 1との偏相関係数は，.174(p＜.05)であり，また父親の支配に関する尺度F 3とCF 2尺度との偏相関係数は，.269(p＜.01)であった．

韓国サンプルにおいて，F 1尺度とCF 1尺度との偏相関係数は，.194(p＜.01)であり，またF 3尺度とCF 2との偏相関係数は，.208(p＜.01)であった．

②母子関係

日本サンプルの子どもの行動についての母親の知識に関する尺度M 1と母親の知識に対する子どもの認知に関する尺度CM 1との偏相関係数は，.224(p＜.01)であり，また母親の支配に関する尺度M 3と母親の支配に対する子どもの認知に関する尺度CM 2との偏相関係数は，.297(p＜.01)であった．

韓国サンプルにおいて，M 1尺度とCM 1尺度との偏相関係数は，.207(p＜.01)であり，またM 3尺度とCM 2尺度との偏相関係数は，.321(p＜.01)であった．

全体として，高い相関値とはいえないが，有意な相関がみられた．このことは，両親の子どもにむけられた関心を，子どもが気づいていることを示唆する結果であるととらえられよう．

5　対応する父母間の尺度の相関

対応する父母間の尺度の相関に関する数値をTable 5-1，5-2に示す．父親版尺度および母親版尺度においては，学年差・性差がみられたものは少なかったが，子どもの学年・性の要因を統制した偏相関値も参考までにTable 5-1，5-2に掲載する．

①子どもの行動についての親の知識

日本サンプルのF 1尺度とM 1尺度の間の相関係数は，.207(p＜.01)であった．韓国サンプルでは，F 1尺度とM 1尺度の間の相関係数は，.495(p＜.01)であった．

②自分の行動についての親の認知

日本サンプルのF 2尺度とM 2尺度の間の相関係数は，.117(p＞.10)であった．韓国サンプルでは，

Table 4-1　親子間の偏相関(日本サンプル)

	F1	M1	F2	M2	F3	M3
CF1	.1736*	.1276	.1494*	-.0311*	.1389*	.1921*
CM1	.0156	.2235**	.0181	.1548*	.0479	.1715*
CF2	.1314*	.0747	.1573*	-.0211	.2688**	.2755**
CM2	.0973	.0863	.1545*	.0107	.2327**	.2968**

+ p<.10　* p<.05　** p<.01
注)学年差・性差を統制したときの偏相関値である．

Table 4-2　親子間の偏相関(韓国サンプル)

	F1	M1	F2	M2	F3	M3
CF1	.1941**	.1676*	.1328	.1080	.1244	.1777*
CM1	.1702*	.2069**	.0919	.1061	.1035	.1408*
CF2	.2540**	.0804	.2296**	.1685*	.2076**	.1159
CF2	.1280	.1961	.0228	.2189**	.2787**	.3209

+ p<.10　* p<.05　**p<.01
注)学年差・性差を統制したときの偏相関値である．

F２尺度とM２尺度の間の相関係数は，.608(p＜.01)であった．

③親の支配

日本サンプルのF３尺度とM３尺度の間の相関係数は，.448(p＜.01)であった．韓国サンプルでは，F３尺度とM３尺度の間の相関係数は，.617(p＜.01)であった．

④愛情

父親の愛情カテゴリーと母親の愛情カテゴリー間のクラメールの連関係数Vは，日本サンプルでは.185($\chi 2(4)=6.29$ ，p＞.10)であった．それに対し，韓国サンプルでは.744($\chi 2(4)=53.13$, p＜.01)であった．

日本サンプルでは，比較的低い相関値が得られたのに対して，韓国サンプルでは比較的高い相関値が得られているのが対照的である．韓国においては，父母間の対応の仕方に一致する傾向が強いのではないかと考えられよう．

6　日韓比較

各尺度の平均値について，日本サンプル，韓国サンプルの間の差をt検定によって比較した(Table 1参照．なお，各学年，性別の日韓間の平均値の差のt検定結果については，Table 3-1から3-10を参照のこと)．

その結果，M１尺度，F３尺度，M３尺度，CM１尺度，CM２尺度，CF２尺度において有意な差がみられた(Table 1参照)．また，F２尺度，M２尺度において差の有意傾向がみられた．M１尺度，M２尺度，CM１尺度は日本サンプルの方が高い得点を示し，その他は韓国サンプルの方が高い得点を示した．ということは，子どもの行動や自分の行動についての母親の知識と，子どもの行動についての母親の知識に対する子どもの認知においては，日本サンプルの方が高い結果が得られたことになる．このことは日本の母親の方が韓国の母親よりも子どもの行動や自分の行動に意識的に取り組んでいることを示しているのではないかと考えられる．自分の行動についての父親の認知の差の有意傾向は，韓国の方が日本よりも父親が意識して子どもに対応する傾向が強いを示唆している．両親の支配および両親の支配に対する子どもの認知は，韓国の方が高かった．こ

Table 5-1　父母間の相関(日本サンプル)

	F1	M1	F2	M2	F3	M3	FL	ML
F1		.2065**	.8159**	.1305*	.2348**	.1504*		
M1	.2089**		.1785*	.7826**	.0244	.3376**		
F2	.8194**	.1773*		.1169	.3056**	.1621*		
M2	.1366*	.7841**	.1137		.0427	.3574**		
F3	.2423**	.0213	.3045**	.0358		.4482**		
M3	.1603*	.3357**	.1591*	.3461**	.4433**			
FL								.1849
ML								

+ p<. 10 * p<.05 ** p<.01

注)上は相関値であり，下は学年差・性差を統制したときの偏相関値FLは父親の愛情を，MLは母親の愛情を示している．

Table 5-2　父母間の相関(韓国サンプル)

	F1	M1	F2	M2	F3	M3	FL	ML
F1		.4945**	.6395**	.3298**	.5346**	.2600**		
M1	.4984**		.5589**	.7223**	.3938**	.5783**		
F2	.6410**	.5647**		.6082**	.5371**	.3585**		
M2	.3314**	.7228**	.6050**		.3901**	.5880**		
F2	.5367**	.3899**	.5390**	.3849**		.6174**		
M3	.2629**	.5739**	.3694**	.5872**	.6177**			
FL								.7439**
ML								

+ p<.10 * p<.05 ** p <.01

注)上は相関値であり，下は学年差・性差を統制したときの偏相関値FLは父親の愛情を，MLは母親の愛情を示している．

のことは，韓国において子どもを統制する傾向が強いことを反映していると考えられよう．

文　献

Ausbel, D.P. et al. 1954 Perceived parent attitudes as determinants of children's ego structure. *Child Development*, **25**, 173-183.

Bardwin, A.L. 1945 Patterns of parental behavior. *Psychol. Monogr.*, **58**, 3.

Baumrind, D. 1967 Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior.*Genet. Psychol. Monogr.*, **75**, 43-88.

Baumrind, D. 1971 Current patterns of parental authority. *Developmental Psychol. Monogr.*, **4**, 1, (2).

Champney, H. 1941 The measurement of parental behavior. *Child Development*, **12**, 133-166.

Cohn, D.A. 1990 Child-mother attachment of six-year-olds and social competence at school. *Child Development*, **61**, 152-162.

Finnie, V. & Russell, A. 1988 Preschool children's social status and their mother's behavior and knowledge in the supervisory role. *Developmental Psychology*, **24**, 6, 789-801.

原野広太郎・応用教育研究所　1977　『教研式親子関係診断検査手引』　日本図書文化協会

カナー，L.（黒丸正四郎・牧田清志訳）1964　『児童精神医学』　医学書院

Ladd, G.W. & Price, J.M. 1986 Promoting children's cognitive and social competence: the relation between parent's perceptions of task difficulty and actual competence. *Child Development*, **57**, 446-460.

Ladd, G.W. & Golter, B.S. 1988 Parents management of preschooler's peer relations: is it related to children's social competence? *Developmental Psychology*, **24**, 1, 109-117.

Lerner, J.V. & Galambos, N.L. 1985 Maternal role satisfaction, mother-child interaction, and child temperament: a process model. *Developmental Psychology*, **21**, 6, 1157-1164.

リン，D.B.（今泉信人ほか訳）1981　『父親―その役割と子どもの発達』　北大路書房

MacDonard, K. & Parke, R.D. 1984 Bridging the gap: parent-child play interaction and peer interactive competence. *Child Development*, **55**, 1265-1277.

MacDonard, K. 1987 Parent-child physical play with rejected, neglected, and popular boys. Developmental Psychology, 23, 5, 705-711.

中西　昇　1959　親子関係の心理学的研究（第8報告）―子どもに対する親の態度の因子分析的研究―．教心研．6(3)，153-158.

大村恵子　1981「親子関係のあり方」久世敏雄・長田雅喜編『家族関係の心理』　福村出版

Putallaz, M. 1987 Maternal behavior and children's sociometric status. *Child Development*, **58**, 324-340.

Radke, M.J. 1946 *The relation of parental authority to children's behavior and attitudes*. Univ. of Minnesota Press.

品川不二郎・品川孝子　1958　『田研式親子関係診断テストの手引』　日本文化科学社

Shaeffer, E.S. & Bell, R.Q. 1957 Parents of attitudes toward child rearing and the family. *J. abn. soc. Psychology*, **54**, 391-395.

Symonds, P.M. 1939 *The Psychology of parent-child relationships*. Appleton-Century-Crofts Inc.

詫摩武俊監修　1991　『発達研式親子関係診断検査手引』　発達科学研究教育センター

―1992.9.30受稿―

付録　親子関係尺度の項目

「親版尺度」

①認知（意識）の項目

1．自分の子どもが，よその家に行ったときに，あいさつをしてるかどうか知っている
2．子どもがきまりを守らないときに，どんな叱りかたをしているか自覚している
3．人から何かしてもらったときなど，子どもが，相手にお礼を言っているかどうか知らない
4．子どもが，よそであいさつをしないとき，どのように注意しているか気づいていない
5．子どもが，どこで遊んでいるか知っている
6．交通ルールについて，子どもにどのように教えているか自覚している
7．子どもが，交通ルールを守っているかどうかわからない
8．子どもが安全な場所で遊ぶようにどのくらい注意しているか自覚していない
9．子どもがどれくらいおけいこ事や勉強をしているのか知っている
10．子どものおけいこ事や勉強にどのくらい力をいれている方かわかっていない
11．子どもがどんなおけいこ事や勉強が好きなのか知らない
12．子どもの幼稚園や学校の事に，どれくらい取り組んでいるか自覚している
13．子どもがどのくらいテレビを見ているか知っている
14．子どもがテレビを見ている時間についてどのぐらい気をつけているか自覚している
15．子どもがどんないたずらをしているかわからない
16．子どもがしているいたずらの内容についてどのぐらい気をつけているか自覚していない
17．子どもの健康状態についてつかんでいる
18．子どもの健康管理のため，どのぐらい気をつけているかわきま

えている
19. 子どもがどんないきさつでケンカするのか，知っている
20. 子どものケンカにどのぐらい気をくばっているか自覚している
21. 子どもの遊び友達を知っている
22. 子どもの遊び友達について，どのくらい関心を持っているか知っている
23. 子どもがどんなおもちゃで遊んでいるか知っている
24. 子どもにどんなおもちゃを買ってやっているかわきまえている

②統制の項目
1．社会のきまりは守らなければならないのだから，どんな理由があっても，子どもには必ず守らせるようにしている
2．知っている人に会ったようなとき無理にあいさつさせることはしない
3．子どもには交通ルールを，必ず守らせるようにしている
4．子どもがどこでどんな遊びをしようと，できるだけ禁止しないようにしている
5．子どもの将来については，親がレールをひいてやるようにしている
6．子どもの勉強については，指示しないようにしている
7．時間を決めて子どもにテレビを見させるようにしている
8．子どもの見るテレビ番組は子どもに決めさせるようにしている
9．どんな事があっても，一定の時間に寝かせるようにしている
10. 歯みがきするかどうかは，子どもにまかせている
11. 友達ともケンカは絶対しないようにふだんから言って聞かせている
12. 子ども同士のケンカについては，口を出さないようにしている
13. 子どもの遊ぶ時間は親が決めるようにしている
14. 子どもの友達については，口を出さないようにしている
15. 子どものおもちゃは親が買ってやるようにしている
16. おこづかいの使い方については，指図しないようにしている
17. 子どもが毎日歯みがきしているかどうか知らない
18. 子どもに歯みがきをさせるために，どのくらい力をいれているかどうか自覚していない
19. 子どもがだれとケンカしているかつかんでいない
20. 子どものケンカの扱い方についてどのくらい関心を持っているか知っている
21. 子どもがどんな遊びが好きなのか知らない
22. 子どもが遊び方についてどのくらい関心を持っているか意識していない
23. 子どもがどんなお金の使い方をしているか知らない
24. お金の与え方，使わせ方についてどのくらい気をつけているか意識してない

③愛情の項目
1．子どもが先生に，きまりを守らないで叱られて帰ってきたとき
□ きまりを守らない理由が気になり心配だ
□ 将来悪い子になるのではないかと心配だ
□ 心配したことはない

2．子どもが交通ルールを守らない場合
□ 子どもにはまだ理解できないことも多いのだと思うのだが，子どもにとって危険なので心配だ
□ 教えたことが守られないので心配になる
□ あまり心配したことはない

3．子どもが勉強やおけいこ事をなまけているようだと
□ 勉強やおけいこ事を，子どもがなぜ嫌うのか，やる気が無いのかと気になる
□ 勉強やおけいこ事は，子どもの将来にとって必要なことなので，どうにかして勉強やおけいこ事をしてもらえないかと気になる
□ 勉強やおけいこ事は子どもの問題なので，やってもやらなくても良いと思う

4．子どもがテレビばかりみることは
□ 子どもの話題が増えるので心配しない
□ テレビばかり見て将来勉強しなくなるのではと思い心配だ
□ 特に気にならない

5．子どもがカゼをひいているのに外出しようとしたら
□ 外出したい理由があるのだと思うが，とても心配になる
□ カゼをこじらせると大変なのに，外出したがるのでイライラする
□ カゼぐらいなら，ほっといてもよいと思う

6．子どもがケンカすると
□ 子どもの成長のためになると思い心配しない
□ 子どものためによくないと思いイライラする
□ 子どものケンカについてはあれこれ考えたことはない

7．子どもが友達と遊んでばかりいるときは
□ 友達との遊びは子どものためになるので心配にならない
□ 子どものためにならないのでイライラする
□ 特に気にすることはない

8．子どもがむだづかいばかりするときには
□ 気持ちはわかるが，子どものために良くないと思い心配になる
□ 将来，浪費家になるのではと思い，心配だ
□ こづかいのことは特に考えたことはない

[子供版尺度]
1．お父さん(お母さん)は，よその家に行ったらあいさつするようにと，いつもいいます．
2．お父さん(お母さん)は，わたしが学校のきまりをやぶっても，ぜんぜんきがつきません．
3．お父さん(お母さん)は，はみがきをするようにといつもいいます．
4．お父さん(お母さん)は，わたしがカゼをひいてもきがついてくれません．
5．お父さん(お母さん)は，おけいこごとや勉強については，うるさくいいません．
6．お父さん(お母さん)は，わたしがおけいこごとや勉強が，すきかきらいかについてわかってくれています．
7．お父さん(お母さん)は，交通ルールについて，いろいろちゅういします．
8．お父さん(お母さん)は，わたしが交通ルールを守っているか知っています．
9．お父さん(お母さん)は，わたしがだれと仲良くしているか知っています．
10. お父さん(お母さん)は，わたしがだれと仲良くするかについて口を出しません．
11. お父さん(お母さん)は，わたしがどこで遊ぶかについてちゅういします．
12. お父さん(お母さん)は，わたしが何をして遊んでいるのか知っています．

13. お父さん(お母さん)は，わたしが時間をきめてテレビを見るようにいいます.
14. お父さん(お母さん)は，わたしがどんなテレビを見るのか知っています.
15. お父さん(お母さん)は，わたしのおこづかいの使い方をちゅういします.
16. お父さん(お母さん)は，わたしがおこづかいでどんなものを買っているのか知っています.